みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第764号（通巻1268号）

東京YMCA

5
2019年

創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館6階
Tel 03-6302-1960
URL http://tokyo.ymca.or.jp/
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　菅谷 淳

東京ＹＭＣＡの使命　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

フロストバレーは、マンハッタンから北西200キロの山間部に位置し、山手線一周以上の広大な敷地をもつ北米最大規模のキャンプ場です。写真右はフロストバレーで行なわれた「オリンピクス」の１コマ。10数カ国から集まった参加者を、出身国とは違う国に分けて競う異文化交流プログラム。

異文化で生きる子どもたちと共に

「東京・フロストバレーＹＭＣＡパートナーシップ」40周年

「国際的な環境で暮らす」ということ

国際事業部　統括　松本 数実

「東京・フロストバレーＹＭＣＡパートナーシップ」が40周年を迎えました。この活動は、１９７０年代に急増していたニューヨーク近郊の日本人駐在員家族のために、東京ＹＭＣＡの本間立夫主事が１９７９年に赴任し、さまざまなプログラムを開拓したことから始まりました。91年には参加者増に伴い、マンハッタンから北西２００キロにある「フロストバレーＹＭＣＡ」とパートナーシップを結び、広大なキャンプ場でプログラムを展開。以後も継続してスタッフを派遣し、ニューヨーク近郊に住む日系人を対象とした日本語を使ったキャンプのほか、中高生のグループ活動や週末の日帰りキャンプなど、年間を通じてさまざまなプログラムを行なっています。

主なプログラムはキャンプですが、その目指すところは「異文化で生きる子どもたちの支援」です。アメリカ生活に慣れない、友達ができない、英語がわからない、などの悩みを抱える子どもたちが、同じような環境にいる子どもたちと出会い、悩みを共有しながら、彼らが社会で強く生きていけるようサポートすることが大切な目的であります。

海外に家族を連れて転勤すると、子どもたちは外国人として生活することになり、また日本に帰国した時は帰国子女と呼ばれます。国際的な環境で生きて行くことは容易なことではなく、子どもの人生に大きく影響を与えます。

多くの子どもたちは平日は現地校に通い、週末は日本語補習校や塾に通って日本語を維持しています。ニューヨークに家族で赴任するといえば聞こえはいいですが、英語と日本語の勉強に追われ「生き地獄だ」と言ったキャンパーもいました。また現地校に慣れていく我が子と「日本語での会話が通じなくなってしまった」と嘆く保護者もいました。キャンプで出会った多くの方の言葉が今も心に残っています。

国際色が強まり、文化が多様化する社会で、母語と第二言語を使いながらどう生きていくかは、過去も現在も未来も大きな課題であり、ＹＭＣＡが果たすべき大切な役割があると思います。

私も２００７年から５年間、小３と年長だった息子２人を連れてフロストバレーに赴任しました。外では英語、家庭内では日本語、ということを徹底していましたが、子どもたちは次第に英語の方が得意となり、家庭でも英語で話すようになりました。「家では日本語で話せ」と言っても「僕たちは１日の９割以上は英語の世界にいる。第一アメリカに僕たちを連れてきたのはお父さんじゃないか！」と言われて何も言えなかったのを覚えています。息子たちが英語で喧嘩しているのに何を言っているのか分からないことも多くなり、親として焦りを感じました。

しかし子どもたちは、どんなに長くアメリカにいて、英語にも現地の生活にも慣れたとしても、やはり日本人として見られます。一方で文化的にアメリカ人に近くなってくると、今さら帰国して日本人として生きることは難しいと思う子どももいます。自分はいったいどこの国の人間なのかと、自分のアイデンティティーに悩み始めます。

子どもたちの心をしっかりとサポートし、異文化環境で育った自分に誇りを持ち、日本語、英語の両方できてよかった等、自信を持たせてあげることが大切だと思います。Nationalの部分がしっかりなければ、Internationalな人間にもなりにくいと考えます。今後もさらにグローバル化が進んでいく中、異文化環境で生きていく子どもたちのサポートを強化する必要があると感じています。「東京・フロストバレーＹＭＣＡパートナーシップ」の役割は今後ますます重要になっていくと思います。

また帰国子女が増え続ける日本社会でも、彼らが帰国後の日本生活にスムーズに適応し、国際性を生かして成長していけるよう、東京ＹＭＣＡに期待される役割があります。少子高齢化に伴う外国人の増加も看過できません。国境を超え異文化の中で暮らす家族と子どもたちへのサポートはさまざまな場面で必要になってきます。

今年はロンドンでＹＭＣＡが誕生して１７５年となります。国際的なネットワークを活かし、地球規模で活動を展開できるのがＹＭＣＡの強みです。パートナーシップの次のステージにおいても相互に協力しつつ、今後も平和な国際社会を築いていく働きを進めていきたいと思います。

（＝2面に関連記事）

赤▽三角

学生時代、ＹＭＣＡでボランティアリーダーをしていた時に、体育館の館長だった本間立夫主事に出会いました。その後本間さんは１９７９年に米国に赴任され、１９８３年に私がニューヨーク駐在員になって６年間、本間ご夫妻にお世話になりました。渡米したその日にご自宅にお招きいただき、本当に安心したことを今でも鮮明に覚えています▼その後家族でＹＭＣＡのプログラムに参加したのはもちろん、委員となってアニュアルディナー、ベネフィットコンサート、駐在員の家庭を利用してのポットラックパーティなどアイディアを出し合い、企画実施しました。場所も資金もない企画でしたが、多少の収益を残すことができたことはとても良い経験でした。帰国後も委員として継続して応援させていただけたことも幸せでした▼40年にわたり、多くの在米日本人の家族にこのパートナーシップがたくさんのプログラムを提供できたことに感謝し、今後ますますグローバル化していく社会で、有益なプログラムが提供できることを願い、10月に日本で、11月にフロストバレーで記念会を計画しています。多くの皆さんと一緒にお祝いしたいと思います。（会員部運営委員　笈川光郎）

ご案内

アジア・太平洋ＹＭＣＡ大会 参加者募集

9月2～6日、御殿場・東山荘で開催

4年に1度、アジア・太平洋諸国のＹＭＣＡが集まる大会が、50年ぶりに日本で開催されます。前回は23カ国360人が韓国テジョン市に集まり「持続可能な未来をつくろう」をテーマにワークショップなどを行ないました。ぜひご参加ください。

【日にち】9月2日（月）～9月6日（金）
【会　場】日本YMCA同盟東山荘（御殿場市）
【参加費】670 USドル（一部参加費補助あり）
【テーマ】自然の恵みに抱かれ、平和に向かって共に生きる
　Living Together Withing Nature on a Path to Peace
【基調講演】スティーブン・リーパー氏
【対　象】ＹＭＣＡおよびワイズメンズクラブのメンバー、
　リーダー、スタッフ

アジア・太平洋ＹＭＣＡユースアッセンブリー

上記大会参加者のうち18～30歳のユースを対象に、都内で「ユースアッセンブリー」も行なわれます。
【日にち】8月31日（土）～9月2日（月）
【会　場】オリンピック記念青少年総合センター（渋谷区）

⇒詳細は　東京ＹＭＣＡ総務部 tel.03-6302-1960まで
（申込み締切りは6月5日まで）

インターナショナル・チャリティーラン

参加者募集　会場ボランティアも募集します

障がいのあるこどもたちを支援するためのチャリティー駅伝大会です。1987年の開始から今年で33年目を迎えます。例年多くの企業・団体にご参加いただいています。今年もぜひご予定ください。

日　時：9月23日（月・祝）
場　所：都立木場公園
参加費：1チーム10万円
ルール：約1.3ｋｍのコースを1人1周、1チーム6人
　（女性1名以上含む）で6周する駅伝です。
問合せ：会員部（Tel.03-6278-9071）

１面より

「故郷」がある安心感と喜びを

東京・フロストバレーパートナーシップディレクター　**池田 麻梨子**

フロストバレースタッフと池田さん
（写真右から3人目）

私は２０１３年からフロストバレーＹＭＣＡに派遣されていますが、この活動には「多様性」「キャンプの力」「ストーリー」という３つのキーワードがあると思っています。

「多様性」は、フロストバレーＹＭＣＡが掲げる８個の大切な価値（コア・バリュー）の１つでもありますが、ここには国籍、言語、経済状況、家庭環境など、実に多様な参加者・スタッフが集っています。日本から来た駐在員だけではなく、アメリカ生まれ・アメリカ育ちの日本人、アメリカ国籍だけれども親が日本人というジャパニーズアメリカン、また日本語が母語の子どもたちもいれば、英語の方が得意な子どももいます。参加費の援助を必要とする子どもたちも増えており、40年前に比べても明らかに多様化しています。私たちはそれを認め、尊重しながら、しかし「日本」を中心に据えて、たくましい子どもたち、家族、コミュニティーを作ることを使命としています。

フロストバレーに来て間もないころ、「僕には故郷が無い。アメリカでも１００％受け入れられることはなく、日本でも外国人扱いをされる。でもフロストバレーはありのままの自分を受け入れてくれる故郷だ」と言う学生に出会いました。世界を見渡すと故郷を追い出された人、故郷を失った人がいます。故郷を求めるがゆえに戦いが起きるし、故郷と言える場所が無いゆえに空虚な社会に生きている人たちがいます。「故郷」と言える場所がある安心感と喜びは人に希望を与えると、私はキャンプの中で強く感じています。多様性を内包しながらも、誰もが「故郷」と思える場所であること、それがこのキャンプを唯一無二のものにしていると思います。

同時に「キャンプ」という手法もまた重要だと思っています。「現代こそキャンプが必要だ」。これは２０１５年に全米最大のキャンプカンファレンスで、ヒラリー・クリントン氏が語った言葉ですが、特にこれから社会を牽引していく「ミレニアル世代」は、スクリーンを眺めている時間が長く、顔を合わせる人間関係が希薄です。彼らが社会性や協調性、創造力、柔軟性、主体性、リーダーシップなどを培うことのできるキャンプが注目されているのです。フロストバレーの２週間ほどのキャンプで、違いを超えた人間関係を築き、誇りを持って生きる力が育まれるのも、「キャンプの力」によるものと思っています。

「東京-フロストバレーＹＭＣＡパートナーシップ」の使命はトライステート地域で生活する日本語を話す青少年とその家族を援助すること、アメリカに住む人と日本に住む人の相互理解を深めること、さらには、世界平和を促進することです。ＹＭＣＡは声を大にして平和を叫ぶのではなく、ＹＭＣＡに参加した人たちの「個々のストーリー」が周囲に影響を与え、社会や世界へと広がっていくのだということを今あらためて感じています。

40年前に蒔かれた種はフロストバレーの地で１万人以上のキャンパー、リーダーたちを育て、社会へと輩出してきました。この先も人を育て、平和で公正な社会を作る働きを続けたいと願っています。

総主事カフェ

東京ＹＭＣＡ総主事　**菅谷 淳**

総主事カフェにようこそ。

本間立夫さん（＝写真）というＹＭＣＡの主事をご存知でしょうか。今から40年前にアメリカに渡り、ニューヨークの日本企業駐在員とその家族のために半生を捧げた人です。当時米国に赴任した多くの日本人家族が、言語や文化、慣習も違う知らない土地で、身寄りもなく心細い生活を余儀なくされているという大きな社会問題に単身飛び込み、子どもたちにキャンプ、大人にはフィットネスやディナーパーティーなど、様々なプログラムを次々と企画・実施した稀代まれにみる行動派主事です。

本間立夫さんと
恵美子夫人

一昨年私が東京ＹＭＣＡの総主事を拝命してすぐ、ニューヨーク在住の本間さんからメールが来ました。「新しい総主事を表敬訪問したい」とおっしゃるのです。私は本間さんの来訪までに、自叙伝「当たって砕けよ！」を少しずつ読もうと自宅に持って帰りました。ところがこれが読み始めたら止まらない、まるで吸い込まれるかのように一気に読み終わりました。「なんてすごいＹＭＣＡの主事がいたんだろう」、深夜に震える自分がいました。

現在当たり前のように行っているプログラムが実は本間さんが苦心の末考えられたものだったり、全国ＹＭＣＡの要職を担っている人たちが本間さんに育てられた、あるいは影響を受けた方々だったり、数々の本間さんの功績、業績が良くわかりました。

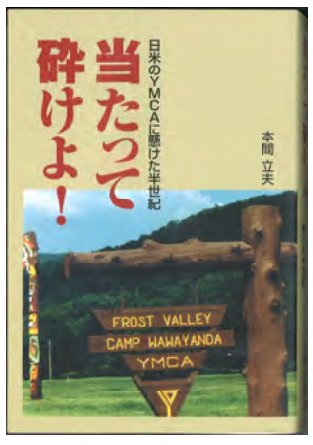
本間さんの行動の源は、運動する時間も場所もない人々、障がいがあって思いっきり外で遊べない子どもたち、自転車を練習する機会がない小学生、米国に駐在し楽しみや生きがいを見出せない日本人家族など、困っている人々、寂しい人々、何をどうしていいかわからない人々を「なんとかしてあげたい」と思ったことにあるのです。

私たちは何か思いついても「どうせ無理だ」とやる前から諦めたり、「やらない」「やれない」理由を探したりしますが、本間さんはまず「やる」のです。そして一旦始めたら何が何でも「やり続ける」、それがすごいところです。

組織が大きくなり小回りが利かなくなると私たちは「安定」を求めます。無難な道、変化のない日常を好みます。そしていつの間にか古くなり、気づけば時代に取り残されて他団体の後追いと模倣に明け暮れます。神様から与えられた無限の可能性を秘めるＹＭＣＡを世の中のために、そして人々のために活かすこと、それは誰もやっていない、考えもつかないような新しいプログラムを創造し実行することであり、そのために必要なのが本間さん由来の「当たって砕けよ！」の精神ではないでしょうか。

この度「当たって砕けよ！」が増刷されることになりました。ぜひＹＭＣＡの主事を始め、会員、職員は本書を読んで、忘れかけていた大切なＹＭＣＡの宝物を取り戻して欲しいと切に思います。

新刊のご案内



「当たって砕けよ！　～日米のＹＭＣＡに懸けた半世紀」

著者：本間立夫

2019年4月　第2刷発行
B6判　全280頁

【価　格】2,000円（税込）
【問合せ】ＹＭサービス
tel.03-6205-6911

■子どもの活動支援のため

チャリティーゴルフ大会に127人参加

「東京ＹＭＣＡチャリティーゴルフ大会」を4月11日、千葉県成田市の「ＰＧＭ総成ゴルフクラブ（旧レイクウッド総成カントリークラブ）」で開催。前日の雨も止み、澄みきった青空と満開の桜の下で、33グループ127人がプレーを楽しみました。初めてご参加・協賛くださった企業や団体もあり、またプレー後のパーティーでは毎年ご参加くださっているタレントの清水よし子さんが「ジャンケン大会」を開くなど、楽しい一日を過ごすことができました。おかげさまで支援金は516,000円にのぼりました。経済的困難を抱える子どもたちや、障がい児、不登校児など、東京ＹＭＣＡが行う子どもの支援プログラムのために、大切に用いさせていただきます。ありがとうございました。（会員部主任主事補佐　小松康広）

■高石ともやさん コンサート開催

バングラデシュ支援へ23回目

フォークシンガーでアスリートの高石ともやさんが4月13日、日本キリスト教団浅草教会で「バングラデシュ奨学基金チャリティーコンサート」を開催。約100人の来場者が温かな「語りうた」に聞き入りました。高石さんは、故江幡玲子先生（思春期問題研究所元所長）に、「勝つために走るのではなく、人の輪を拡げるために走りなさい」と教えられ、その思いをつなぐために毎年このコンサートを続けています。第23回となった今年も、益金15万円をバングラデシュＹＭＣＡの教育支援活動のために寄付くださいました。来場者の皆さま、コンサートを陰で支える実行委員会とボランティアの皆さまに、心より感謝します。（国際部　戸坂昇子）

パラアスリートとスポーツ体験

三菱商事と共催

「第４回ドリームキャンプ」

⇒車いすラグビーの体験。車いす同士で勢いよくぶつかり、試合さながらの衝撃や音も体験しました。

肢体不自由児とその家族を対象としたスポーツ体験イベント「第４回ドリームキャンプ」を４月29日、新豊洲の「Ｂｒｉｌｌｉａ（ブリリア）ランニングスタジアム」を会場に、三菱商事株式会社と共催で行いました。晴天に恵まれ、15家族48名が参加。東京ＹＭＣＡ社会体育・保育専門学校生とＹＭＣＡのユースボランティアリーダーたちも、参加者のサポートを担当しました。

午前中に挑戦した車いすラグビーでは、日本代表選手の今井友明氏とこどもたちとが、車いす同士で正面から勢いよくぶつかる練習もし、試合さながらの衝撃や大きな音を体験しました。車いすバスケットボールの体験では、元日本代表の根木慎志氏による愉快な指導で、パスやシュートの練習に加え、シュートが入った時のガッツポーズや応援の拍手、自分がパスをもらえるようにアピールする方法なども練習し、終始笑い声がたえませんでした。

午後にはトレーナーによる親子ストレッチが行われましたが、家庭でも手軽にできるメニューが多く、保護者は熱心にメモに取ったり質問したりしていました。その後は一つの籠をめがけてみんなで玉を投げる「シーソー玉入れ」で運動会のように盛り上がりました。さらに今年は、クラシック音楽の生演奏の鑑賞と楽器体験もあり、子どもたちはバイオリン、ビオラ、チェロ、フルートなど、普段なかなか触れることない楽器を体験。予定時間を延長するほどの人気でした。

このイベントは今年で４回目となり、リピーターも増え、ゴールデンウィークの定番イベントになりつつあるようです。障がい者スポーツへの関心が高まる中、障がいの種類によらず、誰もが自由にスポーツを楽しめるよう、引き続き他団体と協力しながら推進していきたいと思っています。

（山手コミュニティーセンター職員　大津桃子）

子育てコラム

うれしい言葉。かなしい言葉。

うれしい言葉は「ありがとう」「がんばったね」「じょうずだね」「すごいね」。かなしい言葉は「ばか」「しね」「きえろ」「むこういって」「どっかいけ」。

去年の秋、東雲児童館に来館する小中学生を対象に、日々使っている言葉についてアンケートを行った結果です。普段は乱暴な言葉遣いだったり、憎まれ口の絶えない、ちょっとやんちゃな小中学生たちも実はちゃんと考えているんだな、ということがわかったアンケートでした。

児童館には、小中学生だけでなく、赤ちゃんや幼児さんとその保護者の方々も来館します。では、大人たちの言葉遣いはどうでしょうか？

児童館で子育て支援活動を行っていると、時々「ドキッ」とする言葉があります。「何やってるの！」「いい加減にして！」「だから言ったでしょ！」「早くしなさい！」……。

命懸けで生んだ我が子は絶対的に愛おしく、何物にも代えられない、天使のような存在であるはずですが、日々の忙しさの中で、子どものちょっとした言動が、時として悪魔（？）のように思えてしまい、心から思っているわけではない言葉を投げかけてしまうこともあると思います。

言葉のアンケートの「うれしい言葉」は、言い方を変えれば「相手を包み込む」暖かい言葉。一方「かなしい言葉」は「相手を突き放す」冷たい言葉と表現することも出来ます。

大好きなお母さんに「ぎゅ～」と抱きしめられるような「相手を包み込む」言葉を掛けられた子どもはとても幸せな気持ちになり、「突き放す」言葉を言われた時のショックは計り知れないものだと思います。同時に本心ではない冷たい言葉を投げかけてしまったお母さん自身もとっても辛いのではないかと思います。

児童館での子育て支援活動では、お母さん方の相談に応えるだけでなく、お母さん方が忙しい日々の生活の中でも、我が子を突き放すような言葉ではなく、親子ともに幸せになれるような、我が子を優しく包み込む暖かい言葉掛けが多く出来るようにサポートしていきたいと心掛けています。

江東区東雲児童館
主任　中山　百合江

シリーズ

資料室の窓から〈105〉

機関誌広告と高田畊安

本会元副総主事　齊藤　實

THE NANKOIN HOSPITAL
Chigasaki, Kezagori, Sagami. (Near Oiso.)
UNDER THE MANAGEMENT OF
Dr. K. Takata.
Within a few minutes from the Chigasaki Railway Station.
Healthiest Situation.
FINE SCENERY.

東京ＹＭＣＡ機関紙『基督教青年』1905（明治38）年10月号掲載の広告

１８８０年10月、東京ＹＭＣＡ発行の機関誌『六合雑誌』創刊号は広告を載せた。「六合（りくごう）」とは、天下・世界を表わす言葉である。広告主は「銀坐三丁目　十字屋」。聖書とキリスト教図書を扱う原胤昭（はら・たねあき）の書店である。帝国憲法が公布される22年も前の１８７７年創業である。その金文字の看板「耶蘇書肆（しょし）十字屋」は、朝日夕日で銀座に輝き渡っていたという。今は、銀座松屋と中央通りで向かい合う白亜のビル「銀座十字屋」である。この十字屋内に置かれた「仮局青年会雑誌局」が『六合雑誌』発行所であった。東京ＹＭＣＡの存在を世間に広めるこの機関誌発行のスポンサーは「十字屋」なのであった。

東京ＹＭＣＡが本拠を銀座から神田に移すと、機関誌広告主の顔ぶれが変わった。美土代町界隈の商社の広告が増えた。東京ＹＭＣＡ会員も広告主となった。それは、東京ＹＭＣＡ広報活動への会員による資金援助なのであった。東京ＹＭＣＡが法人化されて２年経った１９０５年10月に発行した機関紙『基督教青年』に、その１ページ全面を使った広告がある（写真）。東京ＹＭＣＡ会員の医師高田畊安が神田駿河台で経営する「東洋内科医院」と、茅ケ崎の結核療養所「南湖院」の広告である。彼は、東大ＹＭＣＡを創立し、第２代理事長ともなった人物であった。彼の会員としての消息を報じた記事もある。『東京青年』１９４０年５月号で、会員活動のひとつ、月例会を開く「基督者医師賛興会」発会後１年の新体制を報じた記事である。新会長に高田畊安。副会長は河田茂。顧問に木下正中。藤本武平二らが委員となった。皆、東大ＹＭＣＡ会員として医療機関・賛育会を創った仲間でもあった。高田畊安経営の両院の広告は、『東京青年』が戦時で休刊する１９４２年11月号、高田死去の２年前まで続いた。